



|                  |                                                                                                                                                                                                                    |
|------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 翻刻「万代大雑書古今大成」 （五）                                                                                                                                                                                                  |
| Author(s)        | 伊藤, 孝行                                                                                                                                                                                                             |
| Description      | 2017年11月29日、本稿の要旨が訂正されました。訂正された要旨は、summary(revised version)のPDFをご確認ください。<br>On November 29, 2017, the summary of this paper was corrected. Please check "summary (revised version)" PDF for the corrected summary. |
| Citation         | 北海道大学留学生センター紀要, 18, 110-126                                                                                                                                                                                        |
| Issue Date       | 2014-12                                                                                                                                                                                                            |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/59654">https://hdl.handle.net/2115/59654</a>                                                                                                                                  |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                                                                                                                                        |
| File Information | JISCHU18_12.pdf                                                                                                                                                                                                    |



## 翻刻『万代大雑書古今大成』(五)

伊 藤 孝 行

### 要 旨

本稿では、『万代大雑書古今大成』(読み…ばんだいおおざっしょこんたいせい)の書誌および翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』

は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が発行された、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は版本であるが、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤(二〇一四)』に続き、「つ」より「ね」まで掲げる。

【キーワード】近代語、翻刻、万代大雑書古今大成

Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon

Taisei

### 凡例

- ・漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・割注はへゝで示した。割注中の改行箇所は／で示した。
- ・●は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

### つ 一 月 の 図 説

異名

玉兔

玉蟾

[[王へんに吉] 璘

氷輪

月八月読御食尊にてまします也  
水陰の精其形円に清く日の光を

請て光る也故に十五日ハ日と月と  
相望ミ人其あいだに居て悉く

其明を見る也晦朔ハ日と月と相

望まず中に地ありて日の光うつ

らざる故見えざる也月の中に隈

ありて物のある如く見ゆるハ大地山

河のうつれりと云説もしかと定

がたしとぞ

## つ二 月々養生食物禁忌の事

△正月元朝子の刻過丑の刻前赤小豆七粒椒酒一合を飲てよし

同寅の時屠蕪酒を吞べし是ハ幼少より飲始べし○同時に小便

を取腋氣を洗へバ大にしるしあり○同五木をとりて湯に焚あび

れバ老て髪鬚を黒くす○同七日男ハ七粒女ハ十四粒赤小豆

を吞バ年老る迄無病也○十日人定とき湯浴すれバ齒をかた

からしむ

△二月二日くこ湯をあびれバ身につやを出して無病ならしむ

○九日魚を食事なかれ○此月韭をくふべし大に人心を増しむ

又蓼と玉子を喰ことなかるべし人の氣をとゝこほらす○庚寅の

日魚をくふ事なかれ大に忌○此月の上旬に脚の三里絶骨対

穴おのく灸七壮づゝすへて毒氣をもらすべし然る時ハ夏至

りて脚氣心を衝のうれひなし○同十四日ハ遠く歩行すべ

からず海陸ともに忌べし

△三月三日ハ神日といひてもろくの鱗あるものをくふべから

ず○同日なづなの花を取床席の下に敷バ虫蠹を去妙也

又苦棟のはなあるひハ葉をとりて床席しとねの下敷

バしらミをさるべし○十三日に白髪をぬけバ永くはへず○十

八日にハ甘きものを省き鹹ものを食すれバ腎氣をまし

固くすべし○寒食の日糯米を水に浸し日を追ふて

水をかへ小満の節に至りて漉出し日にさらし乾し炒て末に

し水にて調ふれバ打撲くじき諸の瘡毒腫物をいやす

△四月八日百草を喰ふ事なかれ草を荏樹を伐事な

かれとなり○此月雉子を食すれバ人をして氣逆せし

む○八ツ目うなぎを食へバ人を害す○鶏の肉をくらふ事な

かれ○生の韭を食べからず人の神をやぶる○夏日ハ大ニ酔  
べからず苦をはぶき辛をまして肺氣を養ふべし朝毎に  
空腹のとき葱のかしらを酒にて飲べし

△五月五日の午の時よもぎをとりて百病を治す同一切の  
菓をくらふ事なかれ百病を發す○同菖蒲の根七莖を

長さ各一寸に切酒にひたし服すれハ打撲を治す同浮萍

を取陰乾にして焼烟らせバ蚊を去べし○【九日 六日 七日 十五日／十  
六日 十七日 廿五日 廿六日

廿七／日】右ハ九毒の日とて房事を忌べし犯せば三年を過す○此月  
韭をくふべからず氣力を乏くす

△六月七日土をうごかす事なかれ○十九日白髪をぬけバ永く  
はへず○六月沢の水を飲べからず韭をくへバ目くらむ尸の肉を  
食事なかれ神氣をやぶるべし○季夏にハ鹹を増し甘

きをへらし腎の臟をたすくべし○夏月あらハに臥べからず  
極暑のときハ手心をあふげバ五体共に涼し○此月冷水に  
手足をひたす事なかれ

△七月七日菖蒲をとり酒にて三方寸也匕を服すれバ酒を飲て  
酔ず但し鉄をいむこれを犯せば吐逆せしむ○同赤小豆  
を男ハ七粒女ハ十四粒吞バ年終る迄病なからしむ同裘を  
晒せば虫生せず○当月茱萸を喰事なかれ神氣をやぶる生  
蜜をくらへバ下利し霍乱を起す雁を食事なかれ

神をやぶるなり

△八月にハ韭をくらふべし薑をくらふ事なかれ人の精神を  
やぶる寿を損ず○鶏肉雉肉をくふことなかれ神氣を

やぶる○たまごをくらへバ神をやぶる○芹をくふべからず  
○生菓を喰事なかれ瘡を生ず○生蜜をくふべからずくわく  
らんとする○秋分の日大に酔べからず○朔日巳の刻過少しの  
火にて足をあたゝめ又こそ冷す事なかれ

△九月九日菊花をもつて酒に醸す其香よく頭風を治す

同日くこをとり酒にひたして飲バ髪白くならず一切の風を  
さる○同日席筵をおこす事なかれ○十八日遠き旅立すべ  
からずたとへ出たりとも道にさハリ出来て其所へ行つかず  
○九月薑を食すべからず目を損ずべし○霜のおりたる瓜を

くらへバ冬に至り翻胃をやむ○季秋の月末にハ甘きをはぶきしほはゆきをまし腎氣をもつはら養ふべし

△十月上の巳の日槐の実をとり服すれバ百病を去り長生神に通ず槐ハ虚星の精なり此月猪肉を喰事なかれ宿病をはつす山椒をくふ事なかれ心を損ず又ひとつもじを多く食すべからず芋を多くくらへバ病をおこす○冬月薬酒を服し立春にいたる事身終るまでかくのごとくすれバ百病共に生ぜず

△十一月生の菜を食する事なかれ宿病を発す蝦土龜

すべて甲あるものを食すべからずとなり○冬至の日多く物

いふ事なかれ一陽まさに生ずつゝしむべし○十日十一日白髪をぬけバ永くはゆる事なし又当月の節に入補薬を飲

べし大ねつ薬ハ用ゆべからずまた東南の賊邪の風をふせぐ

べしこれに犯さるれバ発汗甚しく陽氣耗散して面顔

はれ腰背こハリひきつり痛ミ四肢つうぜざらしむ当月

ハ一陽来復とて陽氣發生する時なれバ陰氣をおさへ陽氣

をやしなひたくハふべしこれ扶陽の術といふなり

△十二月廿四日家内に燈明をさゝげてらすべしあれを虚耗

をてらすといふまた今日終日酒を禁ずべし○此月牛

の肉をくらふ事なかれ人をして神氣をやぶる○蟹を食

すべからず精神を損ず○蝦はまぐり一切甲ある物をくふ

事なかれ蟹の肉を食すべからず氣を損じ血をやぶる

○霜に枯れたる菓菜をくふ事なかれ面上つやなく目

しよりいたましむ○季冬のつきずへ十八日のあひだあまき

をはぶきしほはゆきをまし腎氣をおぎなふべし○大三

十日の夜ハ尤燈明を明らかに捧げ分限に應じ随分家に

燈を多くてらししづかに年を守るべし

### つ三 月の出入の事

三日ハ庚也八日ハ丁十三日ハ乾の上

に月望む十八日巽廿三日艮廿八日

坤すべて五日にめぐるなり

按ずるに三日月より七日に至るまで

庚の方にあらはる八日上弦より

十二日迄丁のかたにあり十三日より十七日  
にいたる迄乾の方により十八日より

廿二日迄巽のかたにあり廿三日下弦

より廿七日迄艮のかた廿八日より二日迄

坤のかたに有也其間五日づゝなり

#### つ四 月の盈虚出入の事

朔日 【うの四分ニ出／とりの四分ニ入】

二日 【うの八分ニ出／とりの八分ニ入】

三日 【たつの二分ニ出／いぬの二分ニ入】

四日 【たつの六分ニ出／いぬの六分ニ入】

五日 【ミのこくニ出／ゐのこくニ入】

六日 【ミのこくニ出／ゐの四分ニ入】

七日 【ミの八分ニ出／ゐの八分ニ入】

八日 【むまの二分ニ出／ねの二分ニ入】

九日 【むまの六分ニ出／ねの六分ニ入】

十日 【ひつじのこくニ出／うしのこくニ入】

十一日 【ひつじの四分ニ出／うしの四分ニ入】

十二日 【ひつじの八分ニ出／うしの八分ニ入】

十三日 【さるの二分ニ出／とらの二分ニ入】

十四日 【さるの六分ニ出／とらの六分ニ入】

十五日 【とりのこくニ出／うのこくニ入】

十六日 【とりの四分ニ出／うの四分ニ入】

十七日 【とりの八分ニ出／うの八分ニ入】

十八日 【いぬの二分ニ出／たつの二分ニ入】

十九日 【いぬの六分ニ出／たつの六分ニ入】

二十日 【ゐのこくニ出／ミのこくニ入】

廿一日 【ゐの四分ニ出／ミの四分ニ入】

廿二日 【ゐの八分ニ出／ミの八分ニ入】

廿三日 【ねの二分ニ出／むまの二分ニ入】

廿四日 【ねの六分ニ出／むまの六分ニ入】

廿五日 【うしのこくニ出／ひつじのこくニ入】

廿六日 【うしの四分ニ出／ひつじの四分ニ入】

廿七日 【うしの八分ニ出／ひつじの八分ニ入】

廿八日【とらの二分二出／さるの二分二入】  
廿九日【とらの六分二出／さるの六分二入】  
晦日【うのこく二出／とりのこく二入】

つ五 露の弁

露ハ水土の湿氣也既に清く  
して且微なり日中にのぼら  
ざるにあらずのほか時ハ風のため  
に吹ちらされまた日にかハかさる  
夜に至てのぼるときハかはかず  
日勢なけれバ冷際にのぼつて  
涸て露となるつゆハ萬物を  
養ひ霜ハ萬物をころすもの  
也朱子のいはく霜ハ唯露結ん  
でなるとなり

つ六 月塞りの事

正五九月ハ きたのかた也  
二六十月ハ ひがしのかた也  
三七十一月ハ みなミのかた也  
四八十二月ハ にしのかた也

つ七 犯土の事

かのえむまの日より七日のあひだ  
大つち也中の一ひのとうしの日間  
日なり○つちのえとらの日より  
七日の間小づち也以上十五日中の  
うしの日間日なりとするべし  
但し犯土の事に付いろ／＼  
億説を畫し雜書あれ共  
必竟巫覡の俗を惑はす偽説  
なるべけれバかならず用ゆべから  
ずといへり

つ八 月に一日他行せぬ日

|       |       |       |      |
|-------|-------|-------|------|
| 正【とら】 | 二【ミ】  | 三【さる】 | 四【あ】 |
| 五【う】  | 六【むま】 | 七【とり】 | 八【ね】 |

九【たつ】 十【ひつじ】 十一【いぬ】 十二【うし】

つ九 月々節により慎べき事

正月の中に飲べからず二月の節に物の命を取べからず三月の節に神事わろしよろづ忌べし四月の節に種をまかず五月六月の節に薬を飲灸をなす共しるしなしといへり成丈医にあふべからず七月八月十二月の節に房事をつゝしむべし九月の節に酒を造り又他行等あし十月の中に湯あみすれバ病となる十一月の節房欲を深くつゝしむべし

つ十 月々運氣考

○正月年の朝の風西北なれば大水有て農功を害す東北の風ハ穀物よく熟す○二月雷初て發するに其声亥子のかたにあるハ其年水有○三月の節に入て山もかすミ木々もうづもれて晴ざるに窓の如く北のかたの雲すく時ハ晴也南風そよくハ雨也○四月立夏の日巳の時南東に青雲あれバ豊年也○五月夏至の日雷あれバ三伏ひやゝか也○六月西北風吹ときハ五穀あしく雨しきりにふれば七月二入て旱す夏の土用にハ山によりたる所ハ五日十日もつゞきて東風吹是を土用東風と云山遠き所ハしからず○七月夜中に東風しきりなれば雨也下旬乾のかたへ雲行ハ大雨か大風也○八月入七月の末より降つゞきて止ざる事あり土用八専節かハりにハ改むるべし○九月雷鳴雨ある

物也是を世にむし入と云○十月もやあれ  
バ来年五月のうちに水あり冬至

の日北の方に青雲あれバ来年豊

年とするべし○十一月冬至の日の風

ハ来年夏至の風と相対す冬至

後一日ミづのえなれバ来年旱なり

○十二月のうち正月の節に入バ冬と

ても土用の終りにハ東風吹也除夜

に東風あれバ五こく大によし

つ十一 月の友引の事

正【たつ】 二【たつ】 三【さる】

四【たつ】 五【さる】 六【ミ】

七【ミ】 八【むま】 九【とり】

十【ひつじ】 十一【さる】 十二【さる】

ね 一年始に貼吉兆の牘

「立春大吉日」

此札を門脊戸其外間毎に

貼事ハ裏表なき文字ゆへ

邪崇妖魔門より入バ脊戸へ

出ると也萬の咒霊府の最上な

るもの也とぞ故に●土にもつはら

なす事也よつて五山及び黄檗

派などの禪寺の樹下石上に居

を卜する僧徒までこれを貼る也

「守護札」すべて扎の字ハ木篇ニハ

書べからず手篇也木篇にて札と

書時ハ若死といふ字なり左傳

にも天札と出たりすべて貴札

芳札ミな手篇よろし●これ

ハ鎮火点なりすべて書べし

ね 二年中風雨考

○正月十五日晴天なれバ菓の類熟して多し正月の中より二月

になり東風吹事多し三月四月ハ乾の方より風吹事多し正月十日

午の三刻ハ風を主る日也もし風吹ざれば雨降也同廿一日ハ大に風雨ある日也同きのえねの日に雨強く降バ其年必旱するなり同きのえに当る日の昼前に大風吹事あれば三日四日のうちに雨必降也きのとうしにあたる日大風吹事あれば惣じて作物に宜からずひのえひのとの日に大風あれば其年多分旱する也つちのへつちのとの日大風吹バ五穀大に悪しかのえかのとの日大風吹バ草木に虫つく也但し夜吹風ハさハリなしこれらハ春ばかりにもかぎらずいつにてもあしき也四季ともに考へ見るべし又丑申高に巳豊年といひて丑申の日の大風ハ米麦とも大にあたる也巳の日の風ハ豊年也未の日の風ハ雨遠くなるなり

○二月社日に雨降ときハ菓実少し同五日晴天なれば米麦下直也同九月十三日十四日十七日これらの日酉の三刻に風を主どる也もし風吹ざれば雨降也二月の白畑とて此月ふる雨ハ麦の爲によろしからず少しツ、程よく降をよしとす又空に雲なく西北の風半時一時ツ、地を吹事有これをバ貝寄と云苦しからぬ風也

○三月三日雨ふれば桑の葉なし同夜蛙鳴バ旱也雨ふれば桑葉よし三月の降麦と云ハ此月降雨ハ麦のためによししかれ

ども永雨降すごせばかへつて麦実のらずして猶五月に雨少く稲植付の爲によろしからず春の南風を羊頭と云て雨になるなり巽の風も同じ事也すべて春の雨ハ強からね共降つゞく物也但し四方の山の根の雲ちぎれたるハやがて晴る、也此時の風ハ寅卯の間にかはる也はる、ハ亥子の時なるべし

○四月八日に雨降バ菓の実少し同十九日廿三日ハすべて未の刻大風ある日也同初のきのえねに大雨ふれば秋かならず大水ある物なり四月の節に入て四ツ時より九ツ時迄巽の方に少しも風なく晴わたるハ豊年のしるし也夏ぬねの日なれば其月雨多しわらうの日風あれば其月晴曇多し又虹あり巳年の日あた、かなれば其月暑さ強かるべし未戌の日くもれば其月虫多く生ず由酉の日はるれば其月冰雪ふる事あるもの也

○五月五日雨ふれば未年に至りて必豊年の印也夏至に西南の風吹バ六月に至りて大に暑氣強かるべし夏至の日北風吹バ水さかりにして米穀多し梅雨の後に空はれてかならず東風吹物也五月の節に入て十五日めに巽の方よりそよ／＼と風吹ハ天気

の次第よしとへ雨あり共此風にてはるゝ物也つゆハ五月の節に入て第一番めに当る壬の日より入て第三番めの壬にあくる也たとへつゆに入ても山の根雲なく風強き時ハ雨降ず次第に風風て南風になる時ハきはめて雨降也此雨のうちに朝東風二三日たへず吹時ハ四五日のうちにまことの天気となる物也

○六月三日雨一しきり降或ハ夜な／＼風吹バ七月になり山の笹かるゝ物也同土用のうち晴天照つめそ／＼吹風を俗に青東風と云五穀に大によき風なり又昼の間ハ照つめ夜にいたりて風あるも豊年のしるし也併西北の風強く吹ハ大にいむ事也土用のうちハ多分東風吹て天気よし又ハ西風吹物也

○七月七日ハ大風ある日也同九日十五日廿七日も午の刻に風あるべし風なけれバ雨ふるべし又東の方に赤き雲気たちて西へまはるハ雨也但し朝の間にて世に是をあさやけと云也【前にしるせし廿四節雲気考の條ニ／＼朝やけ夕やけなどしるせしこれなり】

夕やけハ天気也朝ハ多く雨降也同月未申の雲東へ入時ハ少し雨あるべし脚早く北へ入ときハ大雨也又夜のうち丑寅より風ふき出して雨を催し其風止ずひつじさるの方へまはり東南の雲黒くなるハあとにて大風のしるし也此月夜ひやゝかなれバ風なしあつけれバ南風吹て雨になる事あり

○八月二日八日十七日十九日ハかならず風吹日なり吹ざれば多く雨降なり同社日に雨ふれば来年五穀よし同十日よりうち東南のすミより雲起りだん／＼西北へこむ事あらバ大雨也もし雨降されバ大風のしるしなり

○九月十一日十五日十七日廿九日必風吹是惣じて秋の日和ハ考がたき物也秋亥子の日の雨ハ其月霜多し辰の日雲あらバ其月

晴天多し寅卯の日風あらバ其月霧多し巳午の日はるれバ其月いなぎかり多し未戌の日くもれバ其月雨多し申酉の日はるゝハ其月常よりひゆるしるしなり

○十月初の甲子に雨ふれバ其冬大に寒ずる物也同十五日晴天なれバ冬中あたゝか也十月申の日寒からざれば暴死多し

○十一月朔日三日九日此三ヶ日ハきはめて大風吹日也冬至の日じけ／＼と降出したる雨ハ晴おそき物也雲うすくなりて少し

風をそへ星のちら／＼と見ゆるハ雨の印なり冬至過ての北

かぜハわづかに半日か一日にて吹やむもの也羊頭も同じ事ながら雨になる事多し

○十二月三日五日六日八日廿二日晦日ハミな風ある日なり無ければ雨也寒のうちに日和つゞきてよければ来年雨少し雲中に雨しげければ来年晴天少し大三十日の夜うしとらの風あれば来年五こくよし冬亥子の日の雨ハ其月雲氣強しうしたつの日に雲多ければ其月曇事多し寅卯の日に風あれば其月大風あり巳年の日はるれば其月雨多し未戌の日くもれハ其月雪多し申酉の日はるれば其月霜多し冬至羊頭あれば旱して米高し同はれてあたゝかなれば来年麦実のる也冬至にこち吹バ人にわざハひあり

○正月元日に東風吹バ夏にいたりて米安く又羊頭も米安し或ハ旱を主る也西風ハ春夏米高く豆熟す北風吹時ハ水災あり

○春分の日東風吹バ麦安く其年豊也南風ハ五月前に大水出る其後旱なり又西風ハ麦高し北風ハ米高直なり

○立夏の日東風吹ていかづち東南より鳴ハ年豊也亦西風ハいなむしをつかさどる北風ハいづミわき出る也

○立秋の日東風吹バ人疫をうくべし南風ハ秋旱する也西風ハ大雨北風ハ冬に至り雪多くしてよし

○秋の日北かぜ吹は雨也又秋の夜の北風ハ晴なり

○立冬の日東風吹ハ其冬雪有て凶なり又南風ハ人疫を病事多し西風ハ凶なり北かぜハ玄冬大雪降て寒し

○立春より春分の前後まで東北より吹風ハ萬物せいちやうす

正西よりふけバ人を害す

○立夏より夏至の前後子辰申の時より降雨ハ永し又丑巳酉のときよりふれバ間もなく晴るゝ也又寅卯亥午未の時より降バふりふらざるなり

○春のつちのとうしの日の雨ハ米高し又きのえとらきのとうの日の雨ハ夏に至り五穀高し又かのえとらの日よりミづのとミの日に至り雨あれば米高しきのえねの日降バ其年大に旱なり

夏のきのえねに降バ其秋供水あり秋のきのえねに降バ米高し冬のきのえねに降バ牛羊多く死す

○夏のえたつかのとミの日に降バいなむしあり又ひのえとらひのとうの日に降バ秋五こく高し又かのえたつの日ふれバ蝗を殺すなりかのえとらミづのとミの日に降バ麦の價安し

○秋かのえとらかのとうの日に降バ其冬になり五穀高し

○冬ミづのえとらミづのとうの日にふれバ来春に至り五こく高し又かのえとらの日ミづのえミの日雨降バ米安し

○春夏秋冬ともきのえさるの日風雨あれバ五穀俄に高價なる

也小雨なれバ少し高し大雨なれバ大に高し毎月きのえの日大風吹バひのえひのとの日必雨降也又きのとの日風吹バ米高し晴天久

けれバつちのえの日にあふて雨降又雨天久しけれバかのへの日に当りて晴る也久しく雨降つゞきて晴ざれバひのえひのとの日必はるゝ也

### ね三 年中祝日の譯

○年の始を一月といはずして正月と

云事ハ上天子より下万民に至る迄物事

正しくせよと云心にて正月と云又

朔日といはずして元日と云事ハ元

の字をながし共よし共かしら共はじめ共

よミてめでたき文字なれバ元日とハ云

也或ハ三ツの朝三の始元三元且共いふ

此日をいはふ事神武天皇より始ると

いへり扱此日ハよろづの人の心も

あらたまりたる心地して萬の物のけ

しき辻うらゝかに日々心長●なれバ

何事も新しうせん事を思ふべし今

朝まづ若水とて井花水を汲で

飲也屠蘇酒を飲事ハ一年の邪鬼

を拂ひ瘟疫を病ざる故也我朝にてハ

嵯峨天皇の御宇弘仁年中より始たる

事にて元日にハ屠蘇二日にハ白散三日ニハ

度峻嶂散をめされ給ふ又薬子とて月水

見ぬ女童屠蘇の御試して帝へ

する也又齒かための餅にむかふは

人ハ齒をもつて齡とし命共価る

故よはひをかたむるといふ義也

宝菜の喰積ハ食録の余りあらん事を  
表す裏にも辛盤椒栢酒など、

て宝菜屠蘇と同じ義二祝と也

○門松を立る事ハ松ハ千とせ竹

ハ万代を契る物故に門にたて、

千代万代をいはふ也注連縄を

引事も門衾に同じくむかしより

有是ハ其所のけかれを払也しめ

なハ、左よきによる物也是ハ日月も

左にめぐり海の潮も左にめぐり蔓

ある草も左巻也是にならひてしめ

縄も左まきによる也七五三に藁を

残すハ天の十五すうにかたどりのこし

たるわらの先をそろへぬ物といふ事

ハ天星をそこねずありのまゝのす

なほなるを貴ふ心也貫衆櫨をしめ

にかざるハゆすりはハ若葉栄へて後

古葉おちる故家督めでたく栄ふ

を祝ふ又しだと云草ハ又の名もろ

むきといひて雪霜にもまけずも

ろむきの二葉栄ふ物故に夫婦相

生の義をいはふなり

○七種ハ神武天皇の頃より始まると

いへり哥に

せりなづな五ぎやうはこべら仏のざ

すゝなすゝしろ是ぞ七くさ

五ぎやうハミ、な草といふ物也仏のざハ

かハラけ菜と云也すゝなハ水菜の事

也此七種のかゆを食せバ春の氣病

夏の疫病秋の痢病冬の黃病を

わづらハず無病長命也と云是を打

はやすに食用の品七種をあつめて

又打時のことハにいはいはく

とうどのとりがえほんのたちへ

わたらぬさきにと【云云】

是ハ歳時記に正月七日鬼車鳥わたる此鳥人のたましゐをけしちをしたゝらす血のしたゝりたる家ハ災ありとて正月六日の夜七日のあるつきにも門口たゝきて此鳥をおどろかして余所へやると云此説をもて昔より唐土の鬼車鳥日本の土地へわたるを避んと唱へしをわたらぬさきにとあやまりしといへり

○正五九月に神仏へ参詣して善行をなすハいかなる訳そと云に或書に曰帝釈天鏡をもつて三千世界を

照らし人の善惡をたゞし給ふ

正五九月ハかの鏡にて日本をてらし給ふ故惡をなして天罰を蒙らざるためなりといへり

○涅槃會ハ二月十五日にて是則釈迦

入滅の日也仏入滅ハ唐土にてハ周の穆

王五十二年に当り日本にハ地神五代

鸕鷀草曹不合尊世をしろしめす

時也仏入滅の時ハ沙羅林の色白く

変じたれバ霍の毛に似たれバとて其

所を霍林と云沙羅樹と云木ハ八根

あり此木自合て一株となり如来

の別れを●ミて其色變じて白し

枝葉如来に垂覆ふ十万震動

し苦空を陳哀歎の声あり

大海湧かへり川の流れも涸て日月

又光なし黒風吹て草木摧す

折諸天かなしミさけんで天の香

花を降し天の音楽を奏す

唱て曰苦なるかな何ぞ一旦慧日滅

●すや一切の衆生慈悲の父を失ひ所教の天を失ふと或ハ佛に

したがふて滅するあり心を失ふ有或ハ大に咩びて胸を槌者あり悶絶して大地に倒るゝ者多かりけり

扱如来ハ七十九才にして入滅ましくけり

○三月三日を上巳と云今巳を忌て巳ともいへど同じ義也是ハ今

月辰の月なれば巳をのぞく日とす不祥を除く日のこゝろなるべし

とぞすべて五節共陽の月陽の日を用ふるハ枝陽の術をもつて陰氣

を抑へ邪氣をさくる一術也

昔ハ上の巳の日を用ひられしが後に重三の陽日となれり今日草の

餅を食し桃花の酒を飲バ病を除

くとなん桃ハひとへの花よろし扱上巳を三月三日と定め用ひらるゝ事は

漢の武帝より初しとぞ

○四月八日にハ釈尊誕生の日なればとて

寺々にて灌仏會をなす示生品を按

ずるに仏胎内にある事十月にして四月八日御母麻耶夫人の右の脇の下より生

給ふ此時蓮花おのづから生じたる仏

七足あゆみて蓮花のうへに立せ給ひ天上天下唯我独尊と唱給ふ雲のうへに

黄金の竜顯ハれて一ツハあたゝかき湯を吐一ツハ水をはきて仏にそゝぐ天女

天降て音楽を奏し蓮花をふ

らし帝釈天を始め四大天王仏を

守護し給ふ仏ハ天竺の王の御子

なればしつた太子と号く生れて七日めに御母まやぶ人失給ひしかバ  
伯母君の手にそだてられ給ふ

# 謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。ここに記して感謝申しあげる。

## 注

- 1) 伊藤孝行(二〇一四)翻刻『万代大雑書古今大成』(四)、「名桜大学紀要」十九、一五二―一六四頁

## Reprinting: "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" (5)

ITO Takayuki

This paper presents a part of the book entitled "Bandai Ozassyo Kokon Taisei", which was first issued in the Tenpo Period (1837–1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author's knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here.